様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　5 月　20 日現在

機関番号：34310
研究種目：基盤研究（B）
研究期間：2008～2011
課題番号：20320036
研究課題名（和文）音楽・演劇・映画の世界における「ロシア」イメージの形成に寄与した亡命者の研究
研究課題名（英文）Russian Emigrants　Contribution to the Construction of the Image of "Russia" in the World Music, Theatre and Film
研究代表者
MELNIKOVA IRINA
同志社大学・言語文化教育研究センター・教授
研究者番号：10288607

研究成果の概要（和文）：
本研究では、１９２０−５０年代の日本、フランス、ドイツ、イギリス、チェコ、アメリカにおけるロシア人亡命者の「ロシア」イメージ形成についての研究を行い、以下の二つの主な傾向を明らかにした。１）芸術関係の職種を選んだ亡命ロシア人たちは、言語を用いない芸術に携わることで名声を得ることが多く、彼らの活動は、世界における「ロシア」を、音楽やバレエ、そして演技の国として位置づけることに貢献した。2）２０世紀初頭のロシアにおけるモダニズムは、オリエンタリズムの流行を生み出し、ディアギレフのバレエ団（バレエ・リュス）によって打ち出された東洋の国としてのロシアのイメージは、ヨーロッパを魅了し、亡命ロシア人の映画や演劇、音楽にも受け継がれた。

研究成果の概要(英文)：Our study of the image of «Russia» constructed with the contribution of Russian Emigrants in Japan, France, Germany, Czechoslovakia, Great Britain and the US in the 1920-50s made clear that: 1) the great number of Russian emigrants was engaged in artistic professions and chose non-verbal arts which helped to construct the image of «Russia» as the country of music, ballet and theatre; 2) the orientalist trend of the Russian modernism in the beginning of the 20-th century and the image of Russia as the oriental country promoted by Dyagilev's «Russian Seasons», fascinated Europe and was later adopted in the arts of Russian emigrants.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	2,700,000	810,000	3,510,000
2009 年度	2,100,000	630,000	2,730,000
2010 年度	1,800,000	540,000	2,340,000
2011 年度	2,000,000	600,000	2,600,000
総　計	8,600,000	2,580,000	11,180,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：多文化、亡命文化、ロシア、イメージ研究、映画論、文化的アイデンティティ

１．研究開始当初の背景
（１）個人や社会の意識に存在する、国民・民族など「想像された共同体」（ベネディクト・アンダーソン）のイメージや、文学・芸術・

メディアによるこのようなイメージ形成のプロセスが、近年しばしば研究対象となっているが、「ロシア」の芸術的イメージのタイポロジーに関心を抱く研究はまだまだ少ない。
(2)1917 年の革命後ヨーロッパをはじめ世界各国に広がったロシア人亡命者の足跡は、世界的な演劇の舞台や、映画のスクリーン、大衆芸能などにも刻まれていて、彼らも「ロシア」に関する独自のイメージに関与していた。音楽・演劇・映画の世界における「ロシア」イメージの形成に寄与したロシア人亡命者の作家・プロデューサー・評論家・監督や俳優たちについての研究は政治的な理由で１９９０年代まであまり進まなかったので、大分遅れている。
(3)レパートリーや公演の統制を通じて、ロシア・ソ連によって意図的に形作られたイメージでは、人それぞれの民族的アイデンティティは重視されなかったが、これとは別に、世界のそれぞれの地域、社会集団には異なったイメージが形成されており、その形成には、多文化的環境のなかでたえず自己の民族的アイデンティティを決定しなければならなかった亡命者たちの力が大きかったが、こうした過程や、音楽・演劇・映画などに見られるその表象はきわめて興味深い。
(4)グローバル化の進む世界において、各人はそれぞれに「民族的な振舞い」のプロセスのなかで自己の民族的・国民的アイデンティティを決定していくという、俳優的な立場に置かれているが、日常生活でも芸術の分野でも「ロシア人」の役を演じていた亡命者映画俳優、バレーダンサー、音楽家や歌手の経験は、まだ十分な研究対象とはなっていない。

２．研究の目的
本研究は、以下のような複合的課題を研究対象とする：１）多文化という状況下における演劇芸術・映画芸術の存在をめぐる諸問題、２）こうした状況下に置かれた芸術家、とりわけ職業柄、さまざまな役割を演じなければならない俳優、演技者の文化的アイデンティティをめぐる問題、３）亡命劇作家、監督・演出家、俳優の自己表現をめぐる問題、４）演劇や映画のイメージを通した文化間コミュニケーションをめぐる問題、５）さまざまな国の映画的・演劇的伝統によってつくり上げられた、「ロシア」とソヴィエトのイメージの相関関係をめぐる問題。
　研究対象となるのは、ロシア人亡命者が参加して撮られた、「ロシア」テーマを扱った世界の映画および、こうした映画の製作・受容と結びついた材料（批評・観客の反応など）、亡命者が参加した「ロシア」テーマをもつ芝居や、亡命者によるキャバレー・ヴァリエテなどの大衆芸能・歌謡についての回想・批評文献であるが、映画研究を中心課題としたこの研究の時代的な枠としては、マスコミュニケーションの手段として映画が繁栄した1910年代から70年代を想定している。

３．研究の方法
研究代表者の Melnikova は、ハリウッドやハリウッドのロシア人たちによってつくられた「ロシア」の神話を分析するとともに、日本と満州でつくられた「ロシアの映画的神話」の日本版について考究する。ベルリンとプラハのロシア人亡命社会に関心を抱いている諫早は、ベルリンやプラハで活躍していたロシア人演劇・映画関係者の資料を分析して、両都市における亡命ロシア人の演劇・映画活動を跡付ける。従来からパリで資料収集を続け、演劇と映画の相互関係をめぐるいくつもの論考を著している高木は、パリにおける亡命ロシア人映画・演劇関係者について考察するとともに、フランス・イタリア映画に現れた「ロシア」およびロシア人のイメージについても分析を行う。そして、現在世界の舞台で上演されている「ロシア」的レパートリーについて研究を進めている楯岡は、「ロシア」テーマへの関心をみずからの創作活動に反映させている世界の演劇関係者や、亡命ロシア人（第一次だけでなく、第二次、第三次の亡命者も含めて）とさまざまにかかわりを持つ演劇関係者について考察する。
以上４名の研究グループの共同研究を通して、大量の資料を分析し、これを体系的に跡付け、さまざまな流派のロシア人演劇・映画関係者が、世界の演劇・映画・音楽芸術に及ぼした影響が明らかになったし、亡命者の運命をたどることにより、彼ら自身による文化的アイデンティティの表出や、「創造的生き残り」の個人的苦悩の意味を明らかにすることができた。
４．研究成果
研究分担者は、日本、ロシア、フランス、ドイツ、イギリス、フィンランド、チェコ、アメリカの現地アーカイヴや資料館、図書館、映画保管所で調査をし、「ロシア」イメージ形成に寄与した亡命者（音楽の分野では歌手アレクサンドル・ヴェルティンスキー、マリア・サヴィツカヤ；演劇の分野ではミハイル・チェーホフ；映画の分野では俳優イワン・モジューヒン、ニコライ・コーリン、映画監督ヴラディーミル・ツルジャンスキー、アレクサンドル・ヴォルコフ等）についてデータをまとめ、彼等の芸術的寄与に対する観客や評論家の反応について研究し、彼等が参加した映画を分析した。１９２０−３０年代のヨ−ロッパにはロシアの古典が映画化され、ロシア帝国の歴史及びロシア皇帝の伝記などを主題とするサイレント映画がたくさん作られたことを明らかにした。ヨーロッパで

亡命ロシア人によって映画化されたロシア文学の古典は、当時最も有名で読者からの高い人気を集めていた作品（トルストイの『復活』や『クロイツェル・ソナタ』、ドストエフスキーの『カラマーゾフの兄弟』や『白痴』、プーシキンの『大尉の娘』など）が殆どであった。映画化される際、それらの作品は、西欧の観客にとって理解しやすいように、多いに単純化され、ストーリーラインに書き換えられることが一般的であった。ただし、映画における美術やセットのデザインは、とても手の凝ったものが多く、ロマノフ王朝が暮らしていた宮殿の内装や、サンクト・ペテルブルグやモスクワといったロシアを代表する都市の有名な建築物は、オリジナルにできるだけ近い形で、とても丁寧に描写されていた。ロシア皇帝に対する関心は、革命前のロシア映画では決して描かれることのなかった歴史的事件（クーデター、王家の私生活）に限られた。ロシアの革命や最後のロシア皇帝ニコライ 2 世についての映画が殆どなかったが、後に東洋の架空の国での専制君主に対する反乱を描いた『千夜一夜物語』(1933 年)、伝説的なロシアのコサックの強盗を描いた『ステンカ・ラージン』(1936) などの作品ではロシアの革命が話題にされている。

亡命ロシア人の映画監督たちは（ベルリンのブホベツキー、ウラルスキーあるいはパリのツルジャンスキーなど)、同じくロシア出身の亡命者である美術家や画家を雇ったりし、スペクタクル・シーンを描く際も、やはり大量のロシア人亡命者たちがエキストラとして出演したりしていた。ヨーロッパ諸国の定期刊行物の分析を通して、亡命ロシア人による映画作品が批評家から低く評価される場合でさえ、ロシア人俳優の演技力の高さや、ロシア人美術家による舞台演出のレベルの高さは、ヨーロッパ世界において、確固たる揺るがない評価を得ていたことが明らかになった。

1922 年にパリでエルモリエフのスタジオを基礎にしてできたフランスの映画スタジオ「アルバトロス」の指導的な核とスタッフの大部分は亡命ロシア人であった。「アルバトロス」の諸作品はロシア的な題材を基礎とはしていなかったが、重要な方向性は、東洋的な題材を使うことであった。パリではディアギレフのバレエによって、「ロシア・シーズン」の時期にすでに、民話的なエキゾチズムと東洋のエロティシズムの描写はロシア独自のものだとされていたからである。亡命者の芸術家はその創作活動においてロシアバレエや優れた舞台美術についての神話や、ロシア人の東洋的本質についての神話をよく利用した。

映画においてだけでなく、亡命者たちの生活においても、しばしばカフカスや一般的な東洋的なエキゾチシズムは活用された。オリエントのモチーフはロシア出身の芸術家、デザイナー、ファッションデザイナー、手工業者の作品においても、キャバレーやバラエティーショーの歌手、ダンサー、俳優にとっても（彼らは「シャヘラザード」、「カフカス」、「カズベク」、「クナク」と呼ばれさえした）秘密と謎に満ちたエキゾチックな東洋の国々として、ロシアのイメージを創り出し、ロシアのイメージを支えた。コザックやロマの合唱、カフカスの剣を口にくわえてするダンス、バレエのディヴェルティスマンの「民族」舞踊などは、「ロシア」の娯楽施設の通常の演目であった。

1930 年代には映画が音響を獲得し、ロシア人俳優たちは、サイレント映画ではできたように母国語なしで簡単に撮影することができなくなっただけではなく、亡命は長引くことが明らかになり、ソ連ではスターリン体制が堅固になり、国境を簡単に越えることはできなくなり、国外にいるロシア文化のエリートとソ連文化人との連絡交流は、人為的に制限された。ソ連はもう、亡命者が制作した映画を上映のために買い付けることはなかった。

一方で、亡命者の映画人はもう、1920 年代前半にしていたように、ロシア人ばかりの集団で団結して仕事をしていなかった。彼らは仕事を探して国外のいろいろな映画スタジオにばらばらになっていった。ロシア神話の代わりに、革命や国内戦など、ソ連についての神話が世界の映画に描かれるようになった。

ロシアの革命以降、ヨーロッパに大勢の人が亡命してから最初の 10 年間は、フランスとドイツでは特に、ロシア人の映画人、文学者、芸術家や、専門を持たない人々さえもが、映画界に仕事を見つけ、ヨーロッパの観客や亡命者の間で需要がある映画作品を作ることができた。1920-1939 年代の亡命ロシア人の文化的アイデンティティは、国外のロシア人学校やロシア語の新聞雑誌によってだけでなく、映画、映画の中の「ロシアン・スタイル」とロシア人俳優スター、ときにはロシア的な題材によっても維持された。これらの映画の観客の大部分は亡命者ではなかったので、一般的なヨーロッパの観客のために、ロシアの文化的歴史的神話を書き直すことは不可欠だった。亡命者の映画人は、観客の要求と自分自身の芸術上、思想上の主張との間でバランスを取りながら、これを行おうとした。ヨーロッパとアメリカの映画が創り出した、エキゾチックで歪められたロシアとロシア人の誇張されたイメージを、亡命者の新聞雑誌が受け入れずに厳しく批判したことで、そのバランスが可能となった。

革命後に亡命を余儀なくされたロシア人は、ヨーロッパやアジア（満州）を経由し、

そこで芸術関係の仕事を体験した後にアメリカへたどり着くことが一般的だった。ところが、アメリカにおける亡命ロシア人は、ヨーロッパやアジアのように亡命者同士の芸術団を結成することができず、もっぱらアメリカ人の演劇・映画監督やプロデューサーのもとで俳優や歌手、ダンサーとして起用された。アメリカ映画における「ソビエト・ロシア」の神話は、ヨーロッパ映画におけるそれよりも早い段階で形成され始めた。例えば、『The Last Command, 1928』という映画ではソビエト・ロシアのあり方も、亡命ロシア人の運命も描かれている。第二次世界大戦の勃発寸前まで、アメリカにおける「ソビエト・ロシア」のイメージは、帝政期ロシアに相反するものとして存在していた。こういったイメージの形成には、ロシア人亡命者たち自身も貢献していた訳だが、1943 年以降になると、政治的な情勢の変化に伴って、ソビエト連邦を描くアメリカ映画は、それが帝政ロシアの正当な後継者であることを主張するようになる。アメリカにおけるソビエト・ロシアは、帝政ロシアと同様、音楽やスタニスラフスキーの芸術座、またバレエの国として受け止められるようになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 11　件）

1. Melnikova Irina、１９２０-１９３０年代のヨーロッパ映画における亡命ロシア人とロシアのイメージ，言語文化，査読有、第 14 巻第 4 号、2012, 351-374.
2. Melnikova Irina、Ｔｏｌｓｔｏｖｓｋｏｅ ｕｃｈｅｎｉｅ ｉ ｎｏｖｙｅ ｒｅｌｉｇｉｉ Ｙａｐｏｎｉｉ: ｏｓｎｏｖａｔｅｌｬ ｋｏｌｏｎｉｉ《Ｉｔｔｏｅｎ》Ｎｉｓｉｄａ Ｔｅｎｋｏ, Orientalia et Classica XXIX: Ｉｓｔｏｒｉｙａ ｉ ｋｕｌｔｕｒａ ｔｒａｄｉｔｓｉｏｎｎｏｊ Ｙａｐｏｎｉｉ，査読有、No.11, 2012, 240-255.
3. Melnikova Irina、Ｙａｐｏｎｓｋｉｊ ｂｌｙｕｚ ｉ ｒｕｓｓｋｉｊ ｎａｐｅｖ，Ｉｎｏｓｔｒａｎｎａｙａ ｌｉｔｅｒａｔｕｒａ，査読有、No.2, 2012, 270-276.
4. Melnikova Irina、《Ｔａｊｎｙ Ｖｏｓｔｏｋａ》- ｏｒｉｅｎｔａｌｎｙｅ ｍｏｔｉｖｙ ｖ ｔｖｏｒｃｈｅｓｔｖｅ ｒｏｓｓｉｊｓｋｉｈ ｋｉｎｅｍａｔｏｇｒａｆｉｓｔｏｖ ｚａｒｕｂｅｚｈｙａ ｉ ｏｂｒａｚ ｅｋｚｏｔｉｃｈｅｓｋｏｊ Ｒｏｓｓｉｉ、辺境と異境―非中心におけるロシア文化の比較研究、 査読無、No.2、 2011、60-75.
5. 諫早 勇一、ゴーゴリの《ｐｏｓｈｌｏｓｔｅ》をめぐって―ナボコフの論を手がかりに―、言語文化， 査読有、第 14 巻第 1 号、2011、69－87.
6. 諫早 勇一、Ｎａｂｏｋｏｖ ｉ ｍｏｌｏｄｙｅ ｐｒａｚｈｓｋｉｅ ｐｏｅｔｙ，Ｎａｂｏｋｏｖｓｋｉｊ ｓｂｏｒｎｉｋ， 査読有、No.1、 2011、43-48.
7. 諫早　勇一、Ｇｒａｚｄａｎｓｋａｙａ ｖｏｙｎａ ｉ ｉｓｈｏｄ ｓ ｔｏｃｈｋｉ ｚｒｅｎｉｙａ ｐｉｓａｔｅｌｙａ-ｅｍｉｇｒａｎｔａ Ｎａｂｏｋｏｖａ、辺境と異境―非中心におけるロシア文化の比較研究、査読無、No.2、2011、40-47.
8. 高木 繁光，ファスビンダーとナボコフ　―＜似ていない＞分身を求めて―、言語文化， 査読有、第 14 巻第 1 号、2011、43-68.
9. Melnikova Irina，Ｃｈｅｊ ｓｏｌｏｖｅｊ？ Ｏｔｚｖｕｋ ｐｅｓｅｎ ｒｕｓｓｋｏｇｏ Ｘａｒｂｉｎａ ｖ ｙａｐｏｎｓｋｏｍ ｋｉｎｏ，Ｋｉｎｏｖｅｄｃｈｅｓｋｉｅ ｚａｐｉｓｋｉ、査読有、No.94/95、 2010、190-207.
10. 楯岡　求美、演劇における感情の伝達をめぐって―スタニスラフスキー・システム形成過程についての一考察、国際文化学研究、査読有、第 35 号、2010、73-100.
11. 諫早　勇一、亡命ロシアの子どもたち――モラフスカー・トシェボヴァーのロシア・ギムナジウムをめぐって――、言語文化、査読有、第 12 巻第 1 号、2009、277-291.

〔学会発表〕（計 9 件）

1. Melnikova Irina，Ｄｖｉｊｅｎｉｅ Ｕｔａｇｏｅ: ｉｓｔｏｒｉｙａ，ｔｅｏｒｉｙａ，ｐｒａｋｔｉｋａ,14-ｙａ ｋｏｎｆｅｒｅｎｔｓｉｙａ《Ｉｓｔｏｒｉｙａ ｉ ｋｕｌｔｕｒａ Ｙａｐｏｎｉｉ》，2012年2月13日，Ｒｏｓｓｉｊｓｋｉｊ Ｇｏｓｕｄａｒｓｔｖｅｎｎｙｊ Ｇｕｍａｎｉｔａｒｎｙｊ Ｕｎｉｖｅｒｓｉｔｅｔ（Ｍｏｓｋｖａ）（モスクワ）
2. Melnikova Irina,イワン・モジューヒンとヨーロッパ映画におけるロシア人のイメージ,平成23年度合同研究会「亡命と移動の視点から見たロシア」，2012年2月17日，北海道大学
3. 諫早　勇一、異境のモスクワ芸術座―モスクワ芸術座プラハ・グループと女優マリア・ゲルマーノワ，平成23年度合同研究会「亡命と移動の視点から見たロシア」，2012年2月17日，北海道大学
4. Melnikova Irina，Utagoe as Social

Movement and Cafe Pastime, 13-th International Conference of the EAJS, 2011年8月26日, Tallinn University, Estonia.

5. Melnikova Irina、《東洋の神秘》－亡命者の創作における東洋的モチーフと、「謎のロシア」のイメージ、 科学研究費補助金による合同国際シンポジウム「亡命と芸術―異境のロシア文化」、2010年11月19日、同志社大学今出川校地.
6. 諫早　勇一、Гражданская война и исход с точки зрения писателя-эмигранта Набокова、科学研究費補助金による合同国際シンポジウム「亡命と芸術―異境のロシア文化」、2010年11月19日、同志社大学今出川校地.
7. Melnikova Irina、The Images of Native People of Siberia and the Far East in Russian Film、International Symposium “Orient on Orient: Images of Asia in Eurasian Countries”、2010年7月8日、Slavic research Center, Hokkaido University.
8. 諫早　勇一、Набоков и молодые пражские поэты、The Fourth Vladimir Nabokov International Conference、2009年6月25日、St.Petersburg , Russia.
9. Melnikova Irina, The Soviet-Japanese Cultural Exchanges in the 1950-60s: Screen Images and Reality、12th International Conference of the EAJS、2008年9月23日、Salento University, Italy.

〔図書〕(計2　件)

1. 諫早　勇一、ナボコフと大脱出―脚色から虚構へ, 若島正・沼野充義編『書きなおすナボコフ、読みなおすナボコフ』(研究社) , 2011, 261-269.
2. Melnikova Irina, Constructing the Screen Image of an Ideal Partner, Japan and Russia: Three Centuries of Mutual Images, edited by Y. Mikhailova and M.W.Steele, London: Global Oriental Publishers, 2008, 112-133.

６．研究組織

(1)研究代表者

Melnikova Irina
同志社大学・言語文化教育研究センター・教授
研究者番号：10288607

(2)研究分担者

諫早　勇一 (ISAHAYA YUICHI)
同志社大学・言語文化教育研究センター・教授
研究者番号：80011378

高木　繁光 (TAKAGI SHIGEMITSU)
同志社大学・言語文化教育研究センター・教授
研究者番号：00288606

楯岡　求美 (TATEOKA KUMI)
神戸大学・国際文化学研究科・准教授
研究者番号：60324894